

天御中主

有大主觀。宇宙有大中心。有大主觀故。爲萬有有中心。有主觀者。時如何

根本分派之中心主觀

宇宙之大中心。發大主觀。是天御中主神也。是大根本大本體也。大中

心之分派分派。有中心。其中心。發主觀。是高御產巢日神。神產巢日神

也。是分派分派之根本也。萬有個個之本體也。本體之本體也。

山谷は之を信せず

天之御中主神與宇宙及萬有之三靈九靈

天之御中主神者。此云阿麻能美那迦奴志能加美。阿者歎美辭。麻者

靈也。能者接續詞。美者靈也。那迦者中也。和也。明也。奴者靈也。志者司

也。主也。加美者神也。猶謂阿靈之靈中靈主之神也。而高御產巢日者。

高皇產靈。神產巢日者。神皇產靈也。又高御魂。神御魂也。宇宙悉靈也。

靈之靈之靈也。三靈之凝止結晶體也。三靈之所發展也。所活動也。所



天御中主神

高皇產靈

有大主觀。宇宙有大中心。有大主觀。故爲萬有有中心。有主觀者也。

根本分派之中心主觀。時如何。

宇宙之大中心。發大主觀。是天御中主神也。是大根本大本體也。大中

心之分派分派。有中心。其中心。發主觀。是高御產巢日神。神產巢日神

也。是分派分派之根本也。萬有個個之本體也。本體之本體也。

山谷は之を信ぜず

天之御中主神與宇宙及萬有之三靈九靈。

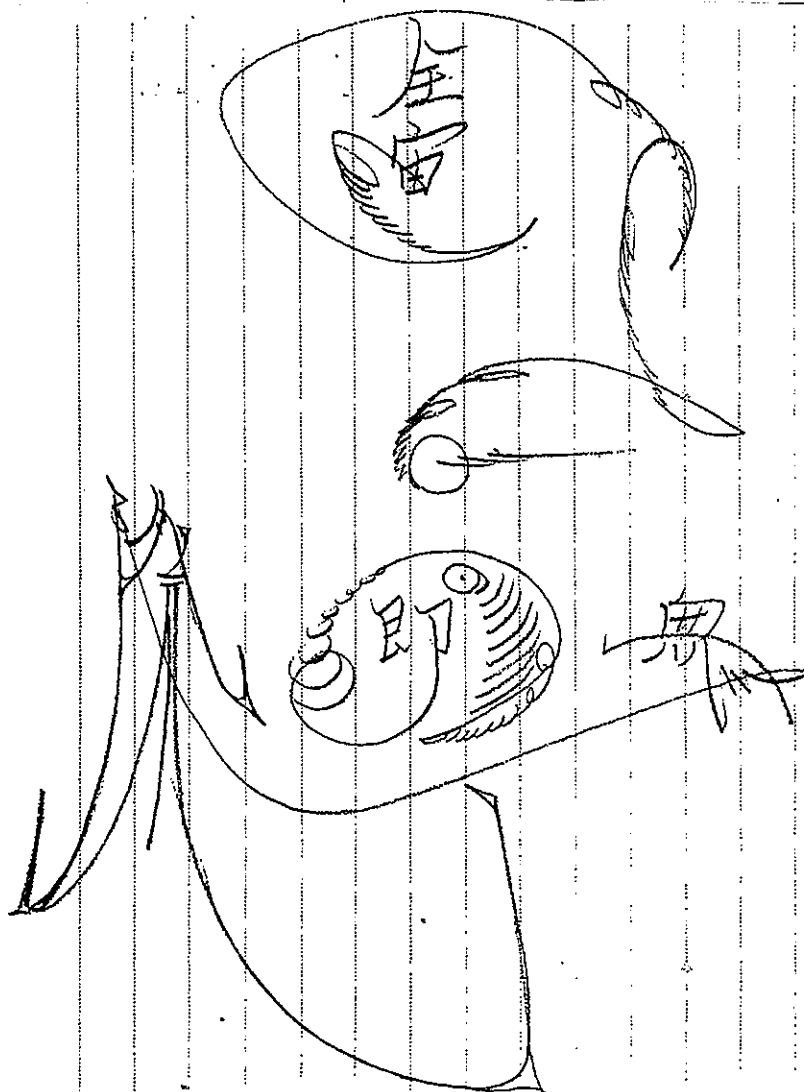
天之御中主神者。此云阿麻能美那迦奴。志能加美。阿者歎美辭。麻者

靈也。能者接續詞。美者靈也。那迦者中也。和也。明也。奴者靈也。志者司

也。主也。加美者神也。猶謂阿靈之靈中靈主之神也。而高御產巢日者。

高皇產靈。神產巢日者。神皇產靈也。又高御魂。神御魂也。宇宙悉靈也。

靈之靈之靈也。三靈之凝止結晶體也。三靈之所發展也。所活動也。所



◎◎

第一

後契ヲ脩ムル人ノ注意スベキ事
人我ノ見ヲ捨ツルコト。一

第二

神言靈巫ヲ觀ルベキコト。

第三

天真井ノ水ヲ仰ギマツルベキコト。

第四

一神ハ日神ニシテ兩儀ナリト知ルベ

第五

言ハ神ナリト悟證スベキコト。

第六

相モ神ナルコトヲ悟證ルベキコト。

第七

上下内外一團ノ光明體トシテノ神國ヲ

築木キ成スベキコト。

以上

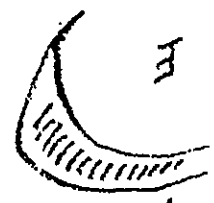
疎禊

今乃現雨。

留給。

自今日

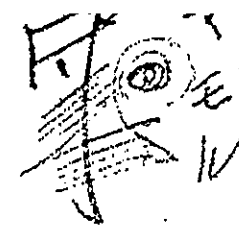
五日



五夜。

此度

月



留海爾。

眞清



中



乃水乎汲美。

諸有乃禍事

疎遺。

弗歧坐。

明魂。清魂

漢方医学書

素問 挙痛論篇

七情鬱血

怒る時は、氣が逆上し、

喜ぶ時は、氣が弛緩し、

悲しむ時は、氣が消沈し、

恐がる時は、氣が下降し、

驚ろく時は、氣が混乱し、

勞する時は、氣が消耗し、

思いつめる時は、氣が鬱血する

この「怒」、「喜」、「悲」、「恐」、「驚」、「勞」、「思」は、「勞」を「憂」におきかえれば、そのまま人間の七情となる。

心的作用と身体作用とは、つながっており、「心」と「身体」とは、相互につながり、いささかも「切れ目」がない、と素問は説く。

内因としての七情が、病因論の中で詳細に説かれている。

では、七情が起こった時、どうすれば氣を平らに保つことができるか？

山

從

馬

鳴

此の「^{カミ}華の神」は蓋、全宇宙神の御意志であるから、人類世界にありて、此の「カミ」のままなる聖者が国を建てては、「全人類主宰の大天皇」と称へまつるので、その国は天皇国である。

全人類主宰の大天皇を中心と仰ぎまつる人類は、中古以後、各地の歴史が伝ふる如き、又或は、現在世界に見るが如き、隣邦を切り取りし、隣人より略奪して、自国自身のみの富饒強大を謀り、地球上を分割し占據するが如きものでないこと固よりである。

噫。

旧邦は既に廃れた。

人は皆、全力を捧げて、新邦の築成に励まねばならぬ。

その新邦の目標は、「^{アマノイハクラ}天磐座」である。

「アマノイハクラ」と云ふのは、下も上も内も外も、スミスミテ スミキリタル もので、それは、

「山裡清明」である。

山裡清明の文は、仮借なること勿論で、外から見れば、ガヤガヤ ゴチャゴチャ と騒ぎ乱れてゐるものも、中は スミスミテ、静に穩に キレイ だとの義である。

「山」とは、水平面から凸出したので、顯著なので、支那人の象形文である。日本語では「ヤマ」と呼ぶ。

「ヤマ」の「ヤ」は、「ハ」であり「矢」であり、出でまた出づるものであり、「マ」は、円なので、身魂なのであるから、「ヤマ」とは、水平線上に突出隆起し、やがては、一箇独立体を築き成すもので、その極は「球」である。つまり、「小宇宙」で、経と緯とを有する箇体である。之れを客観すれば、現在私どもの見るが如く現

象世界である。が、その裡は澄徹玲瓏、一塵を止めざる零境である。それ故、「山裡清明一塵不起」とは、神界の形容である。

「大海平等一波不立」と云ふも同様で、同じ神界を別の面から形容したまでである。唯、前のは、大宇宙を $\square$ と描いて、成数としての五が、更に神業を完成すべく、一步を転じたので、「ム」で、六である。之れを六の零と呼ぶのは、此 $\square$ （ $\boxtimes$ ）の如くで、未、その主を認めざる大虚空であるから、零海と呼ぶべき「〇」である。「山裡」も「大海」も、人間の平生見慣れた物に寄せて、人に話したので、共に清明澄徹の靈境で、その主を仰げば「カミ」である。 $\square$ も $\bigcirc$ も共に空中で零で、やがて、それは、家屋で宮殿で、オホミソラでオホウミで、数としての零で、人間的には「何も無いやうで」、さればとて、決して「無い」のではない。とても云ふべきである。一塵不起、一波不立と云つて、一塵無しとも、一波無しとも云はぬのは、此の故である。實際に「無い」のではなくて、起らぬので、立たぬので、何時起るかも知れず、何時立つかも知れぬのである。全宇宙は悉皆、「神魔」の体であり、用であるから、裡と外と離れることはできず、別にはならぬこと固よりである。

「此ノ時迷フ経ニ処。形問フ影ニ何從」

此の「形を神と云ふべくんば、影を魔と云つても可い」。神魔雜糅なのは、逕に迷ふ処であり、明め得れば、神魔同凡に在るもので、魔もまた魔とは呼ぶべからず、神界築成の資料と成るのである。

「天と地と未割れず」とか、「天と地とを別け来し」とか、陰と陽とも分れず」とか、「独神」「一神」等と紀記などに、載せてあるのも皆、神魔同凡の「カミ」で、支那文字に $\textcircled{\text{ム}}$ と作り、猶太の創世紀に、神は神の姿に似せて人を造つたが、その人とは、未「男と女と」別れぬ「独」だと伝へたなども、「カミ」と「ヒト」との関係

人間各自天分存。

行止進退唯是正。

正誠正義神國築成。

山谷昨夜天界に遊ぶ。

天界は五彩晃耀の白玉樓にし
て七重四匝の一圓相なり。

此是白玉は八意思兼神にして
八神殿にして三神にして天御中
主神にてましますなり。

よし。

人間各自天下
 止進退唯
 正誠正
 義
 日本天
 自
 國
 正存

昭和廿年二月廿日
 山谷

山谷 多田雄三先生の筆蹟

正正
義誠

謝
筑
威
之

我は一人の我にあらず(三)

多田山公秘稿

風擾々 雲漠々 水漫々

雨肅々 土黙々 人悶々

昭和十三年四月十四日

午前快晴静穏 午後曇出で風

木曜日

昨日、舟橋満氏を訪ひ、手傳を求めしに、荏柄天神繪巻模の約有ればとて謝絶せられた

。松本彌惣治氏を尋ねしも、不なり。

池の端仲町にて紙を求め、上駅より車にて歸宅す。

今日は上林重徳氏を訪ひしに在なり。

時々麴町の才邸より電報などて呼ばるることあり。

近頃は在宅せしも、昨日出か、今日も午後より出かけたりのことなり。

寒くして風出でたれば、急ぎ途に就く。

よし
やよし

ひとのまへにぞ
われかてる

かみのまへにも
ますらをにして。

よきだにたちみたれにたれし
ゆふしではきみがみいのちしめ

ゆひしわがおほきみのみちから
ぞおほやまとみすまるみたまか

みとこそしれみたみもろもろ。
鷹は飢ゑても穂を摘まず。

鷹は立ちても後を濁さず。
大正の人道は人天萬類の依ら

ざるべからざる大道にして、天
魔鬼畜と雖、此の大道の外に在

るものにてはあらざるなり。
人間各自天分存。

行止進退唯是正
正誠正義神國築成。

山谷昨夜天界に遊ぶ。
天界は五彩晃耀の白玉樓にし

て七重四匝の一圓相なり。
此是白玉は八意思兼神にして

八神殿にして三神にして天御中
主神にてましますなり。

よし。

笹島月山氏長女光子、病臥に
會ひ、再起せさせ給はんことを
神明に祈禱すること日夜にして
然も遂に死に臨む。

事既に定まるに及びては、祈
禱するも少しの力すら入らずと
語れり。

然り。

然れども、神は早く既に其の
天壽を定め給へり。

何ぞ人の祈念すると否とに其
の力の何如を區別することあら
んや。

其の力の入ると否とは、其の
人の念力如何に依るのみ。

若然らざれば、卑賤の魂魄が
然らしむる所以にして、神意に
あらざるはもとより神慮の發動
にあらざること固よりなり。

順徳天皇の御撰 禁秘抄 玄上
凡此ノ琵琶、云レ體云レ聲、不

可説未曾有ノ物也。爲リニ靈物一
人ノ爲スル跡ニ之時ハ、有リテニ貴人

如何跡にはするぞと云て、入ルニ
人ノ夢ニ、皆着タルニ直衣一人也。

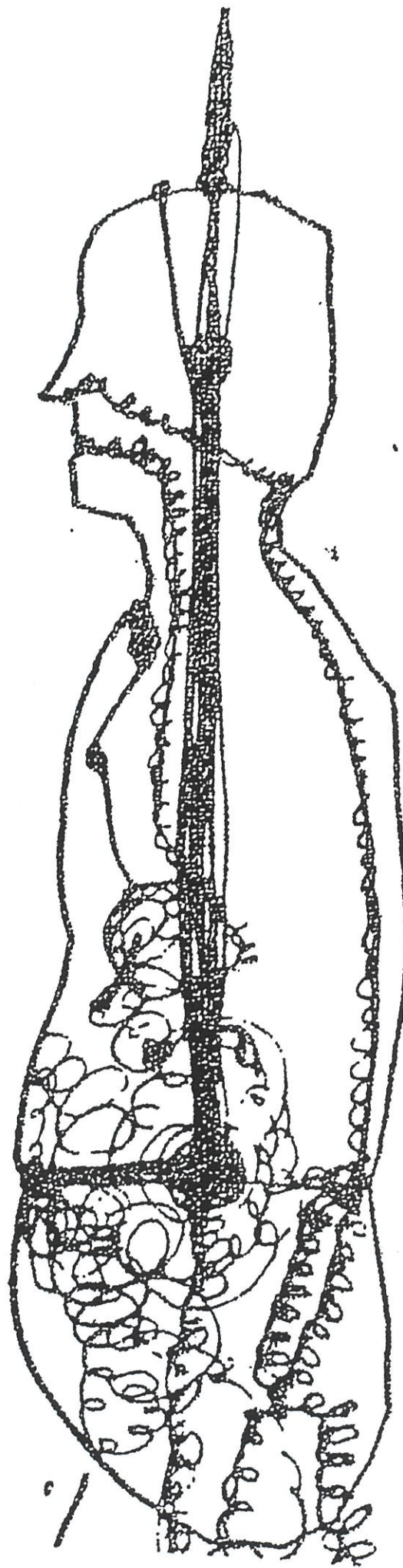
此の直衣を着たる人は何ぞや。
琵琶の化身か。

或は守護神か。
乃至作者・愛蔵者等の靈か。
孰れなるかを知らずと雖、そ
れ等のいづれにても有り得るな
り。

人の漫然、御神體を拜したり
と称するものには、應化神と幽
魂の類と他の念慮の類と自己の
靈念思考等との多種多様有るな
り。

而して、神の御影としては、
應化の神より以外には唯光のみ
にして、人の見て御神體と称す
るが如きものの有るにはあらざ
るなり。

(完)



五の緒図

字斗家

第六

(主觀)

生魂

玉留魂

直靈

和魂

意思

奇魂

智

幸魂

情

生足留

足魂

八千魂

八十萬魂

荒魂

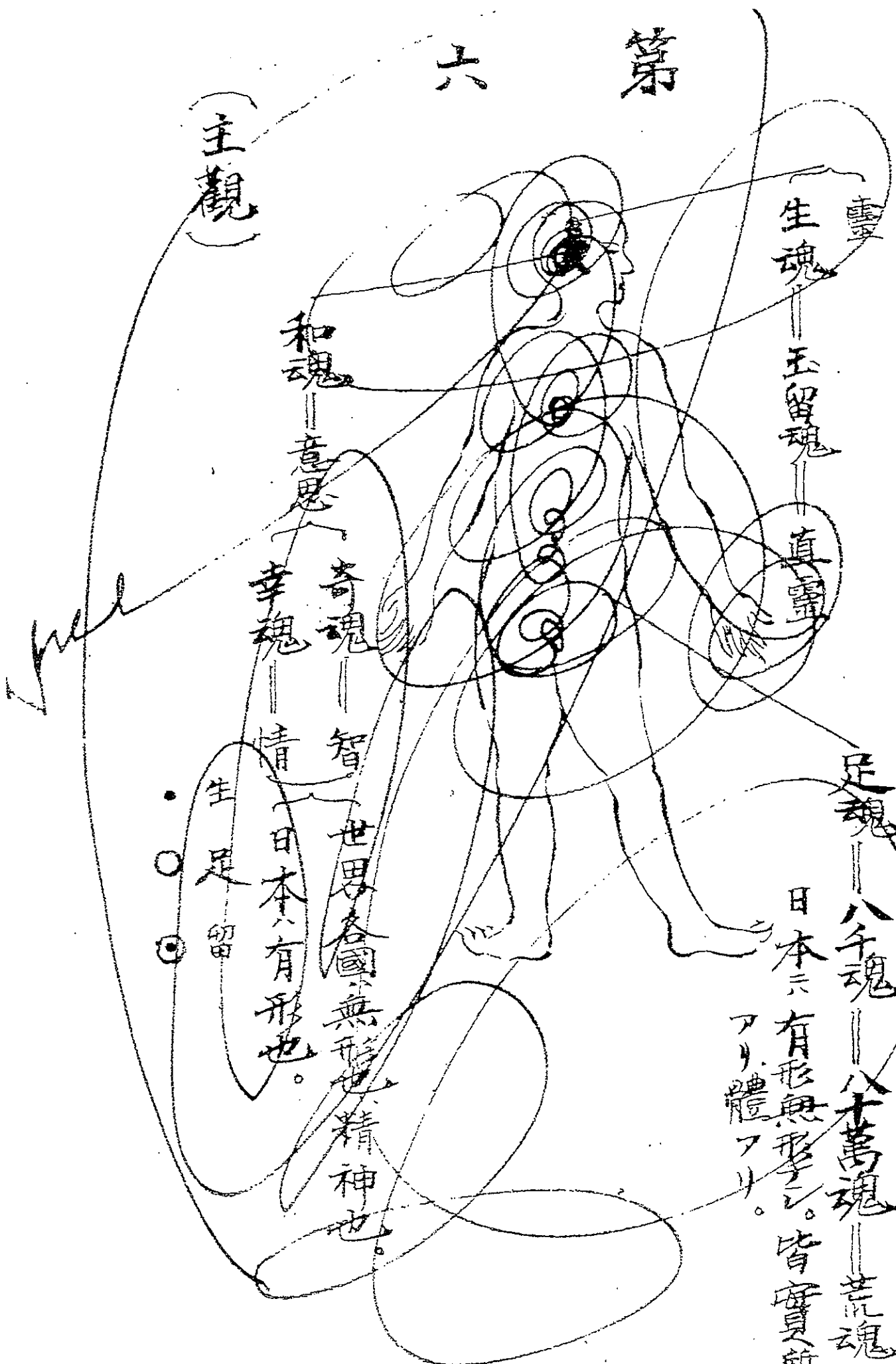
有

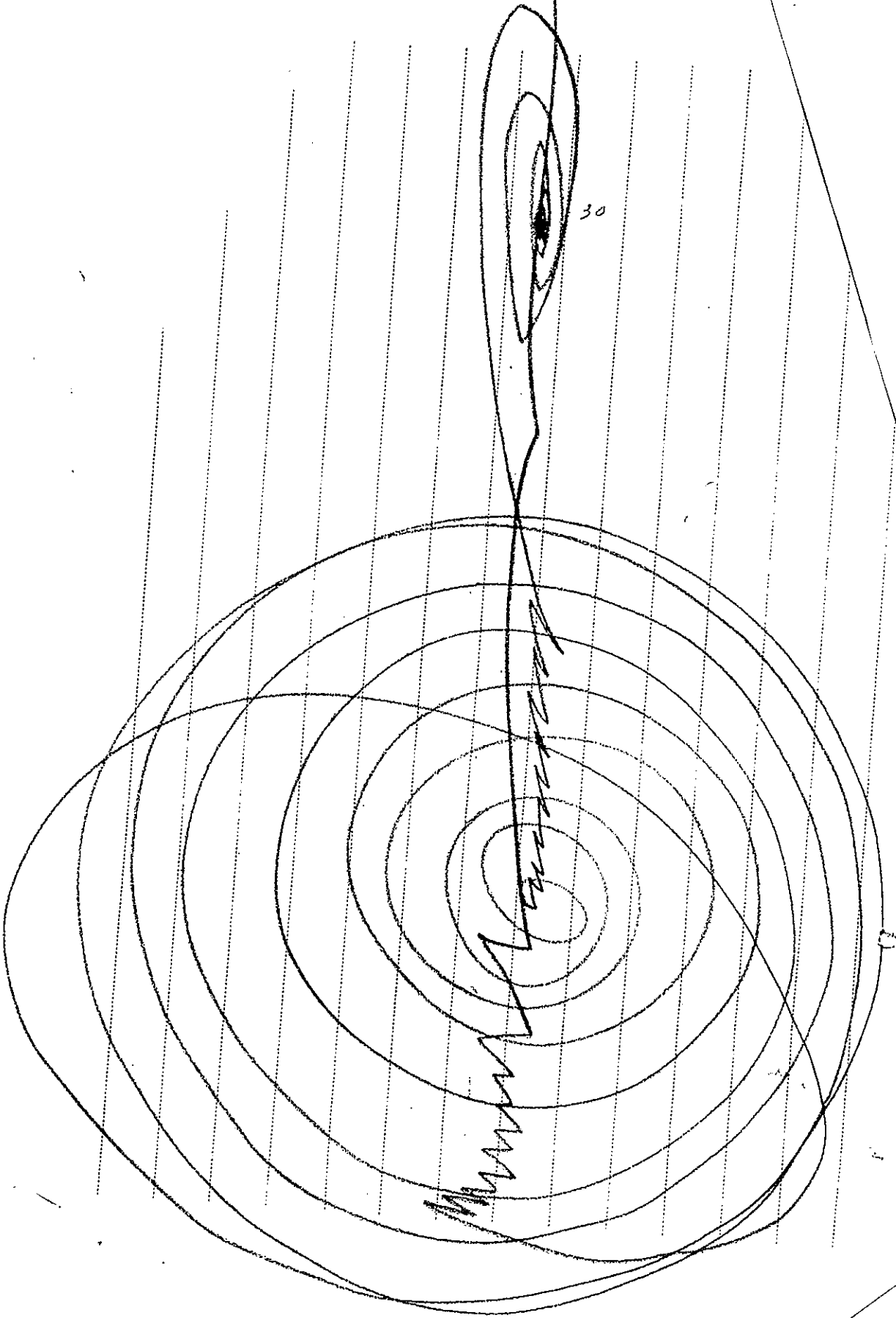
世界列國之肉体也、有形也。

日本有形無形、皆實質アリ。

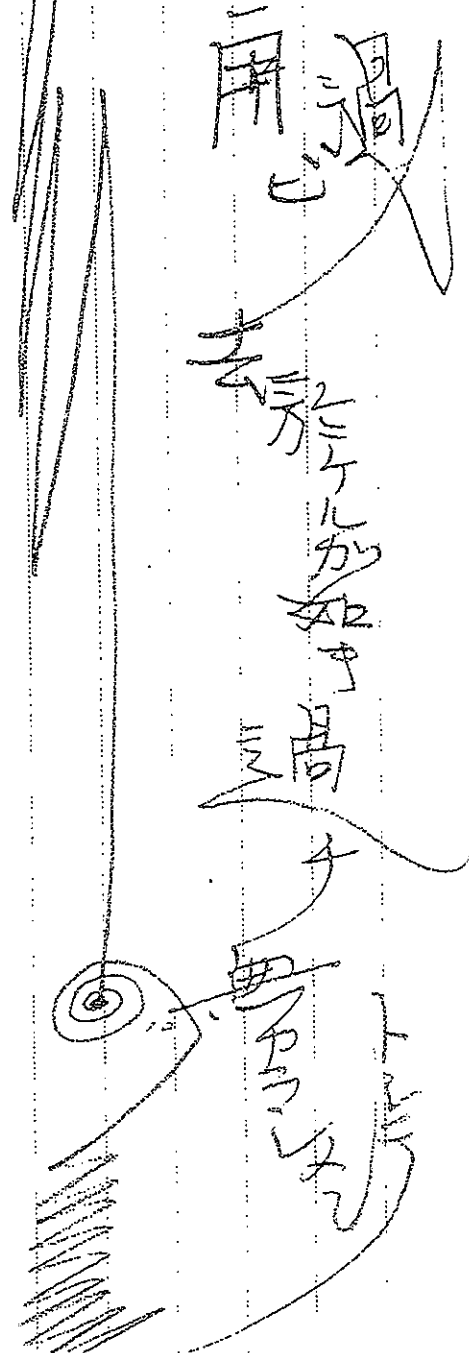
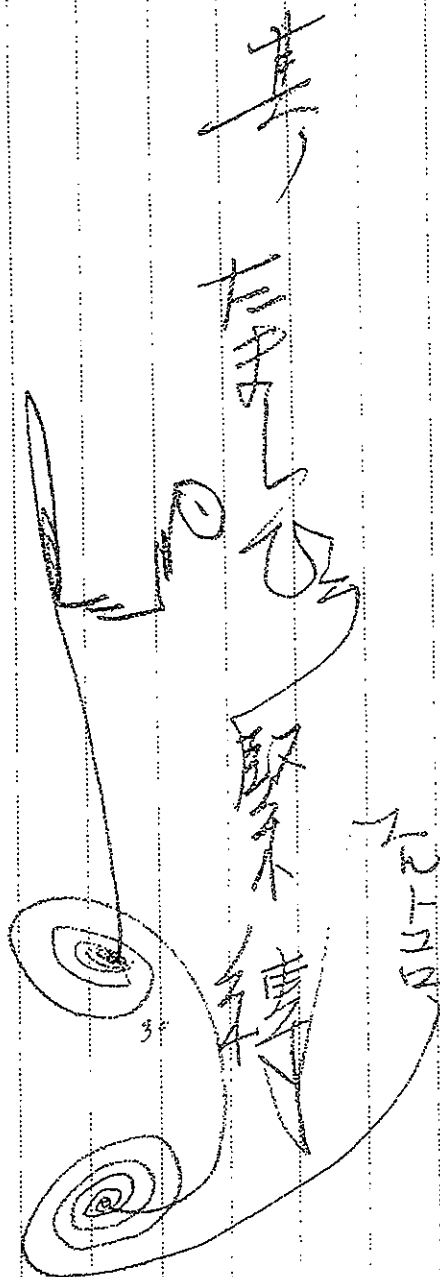
世界各國無形也精神也。

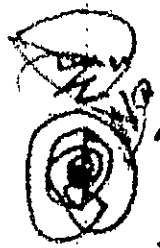
日本有形也。





No.





萬事指^{ハンジ}

定^{サダメ}

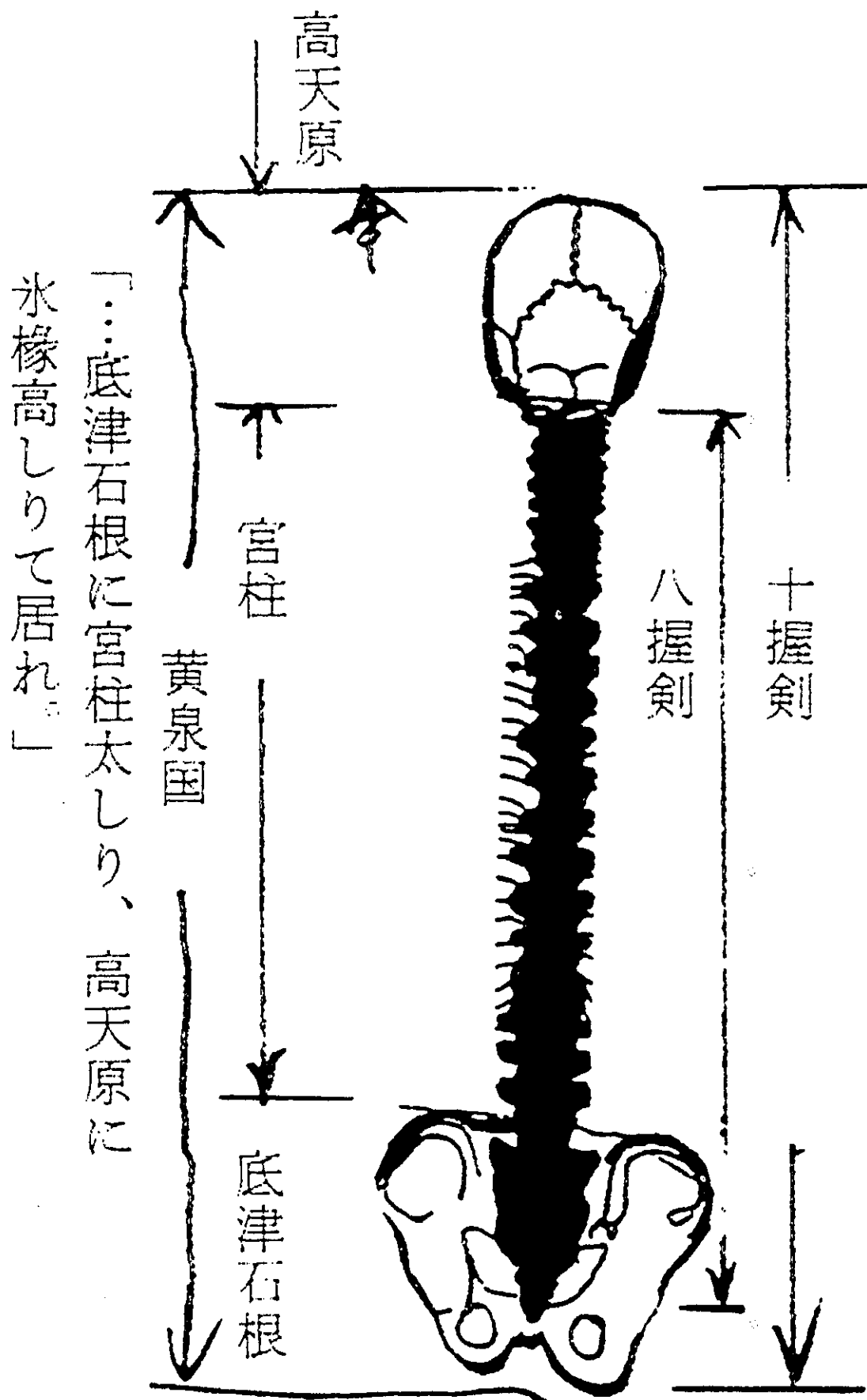
道^{ミチ}者^{モノ}の指^{サシ}圖^ツ

に從^{シタガヒ}ひ

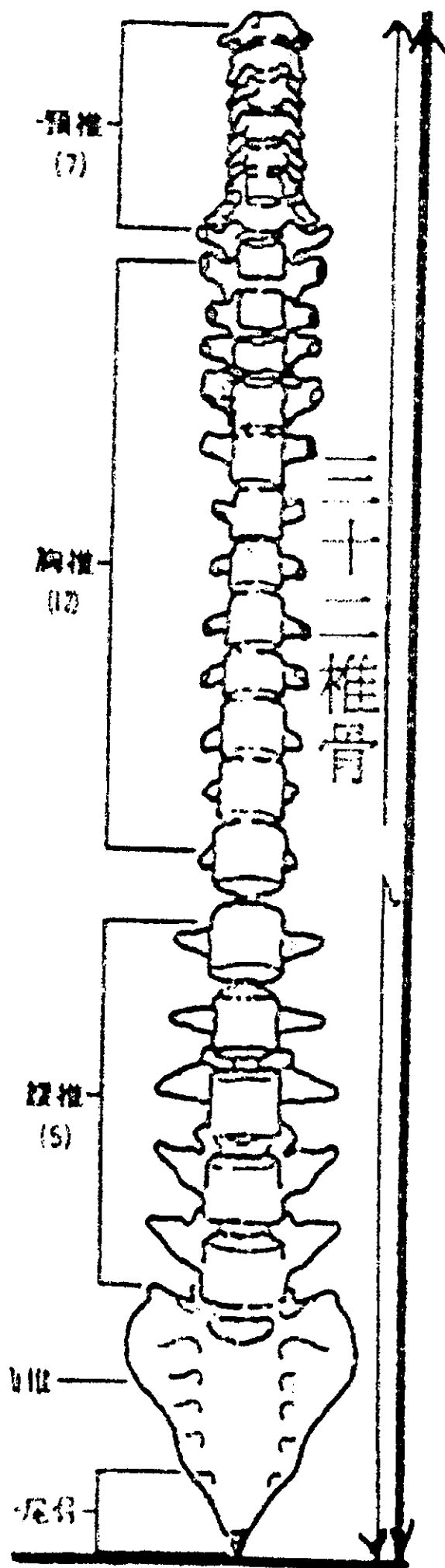
專^{セン}心^{シン}一^{イチ}音^{オン}心^{シン}

成^{ナリ}るきもの

大國主の宮殿

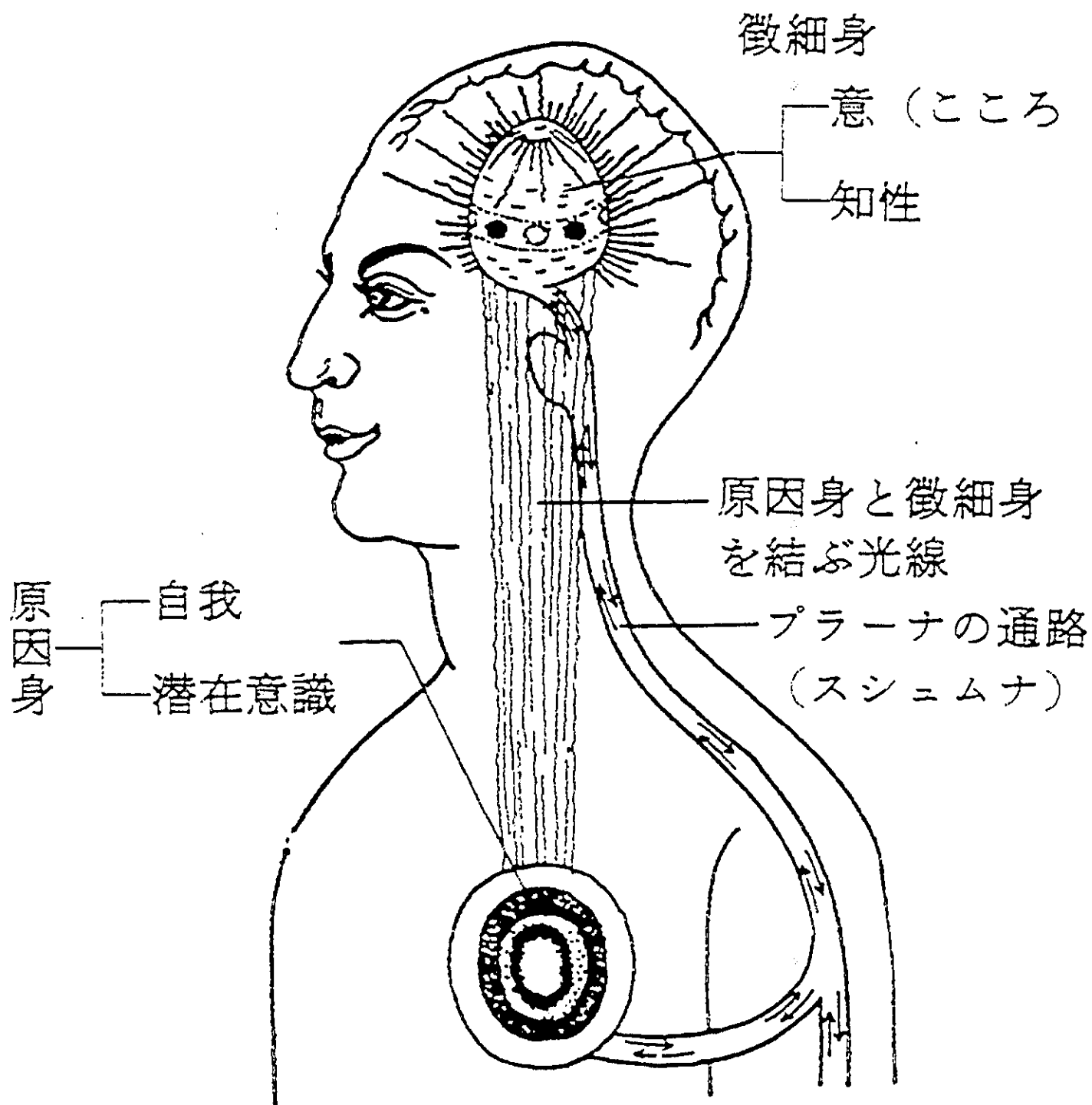


八握劍詳細圖



背骨(脊柱) 前

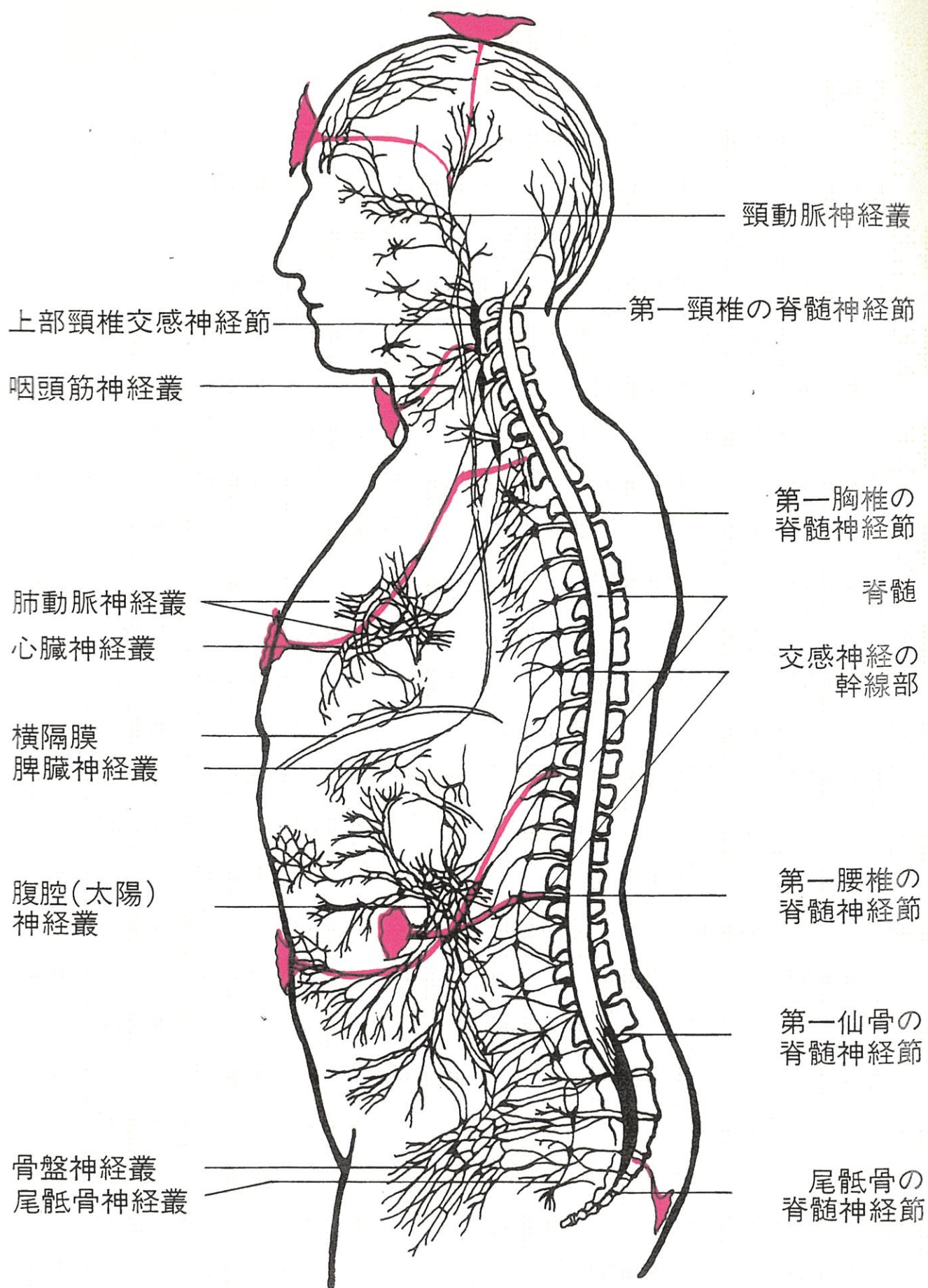




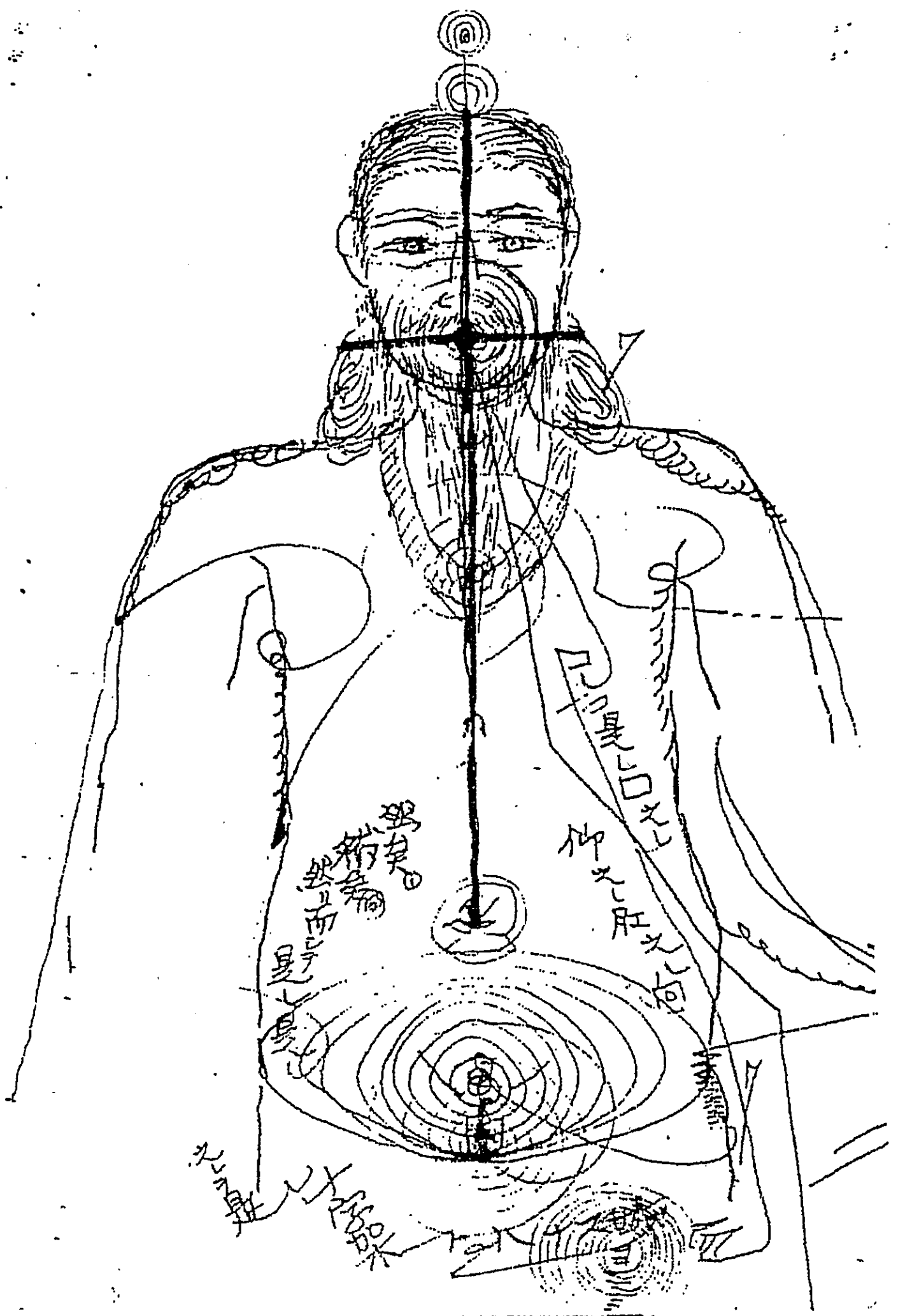
微細身——→
八尺瓊勾玉

原因身——→
八咫鐘



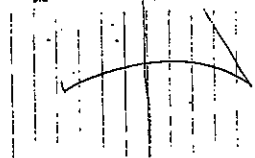


図版 X チャクラと神経系

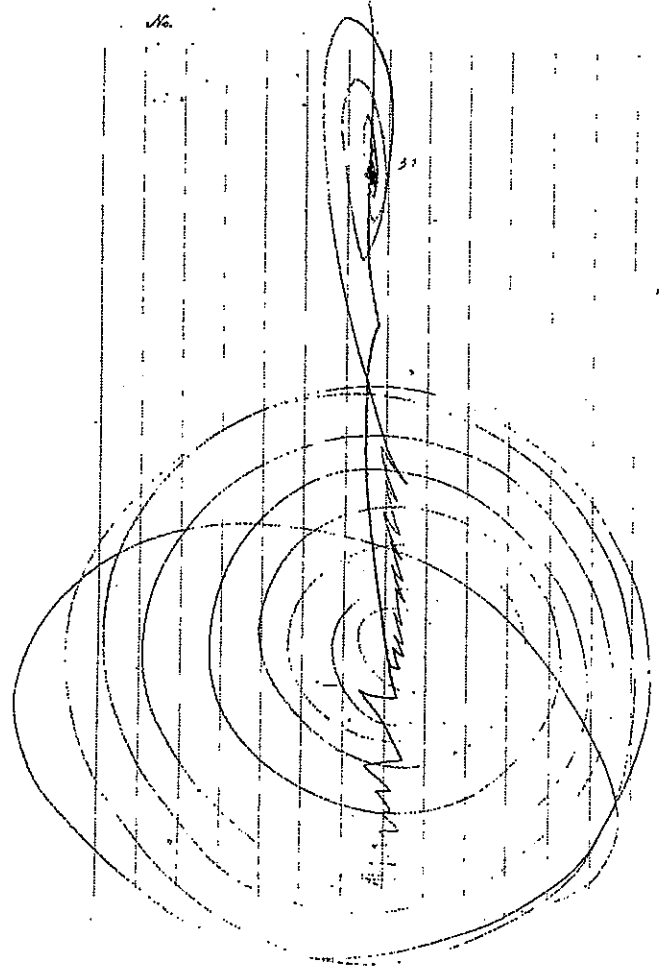


山多田雄三先生の筆蹟

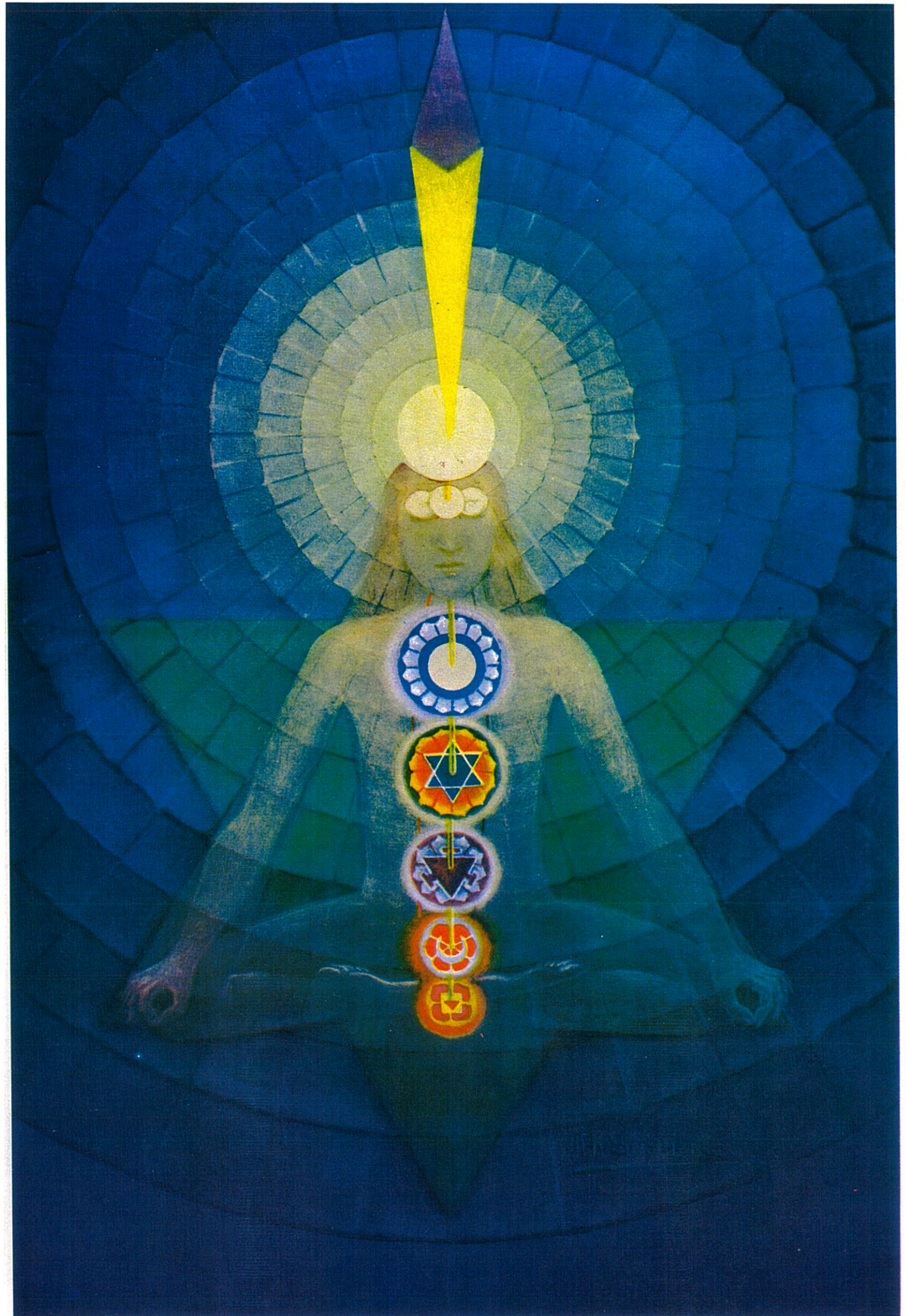
47



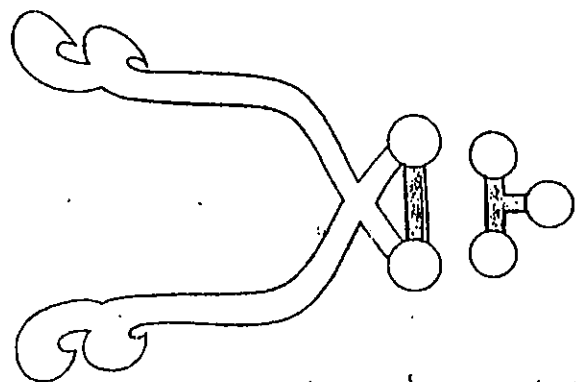
16



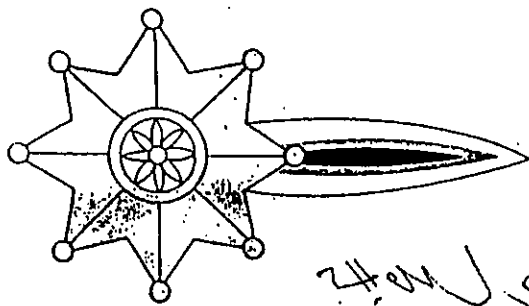
13
7



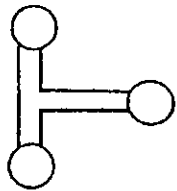
十種御寶



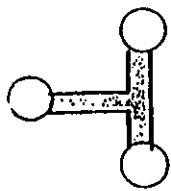
あかひのくさ



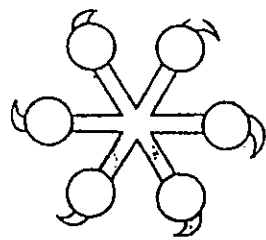
あかひのくさ



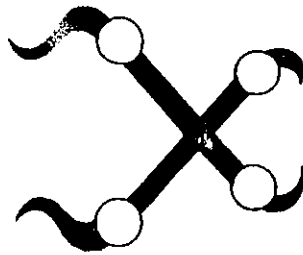
あかひのくさ



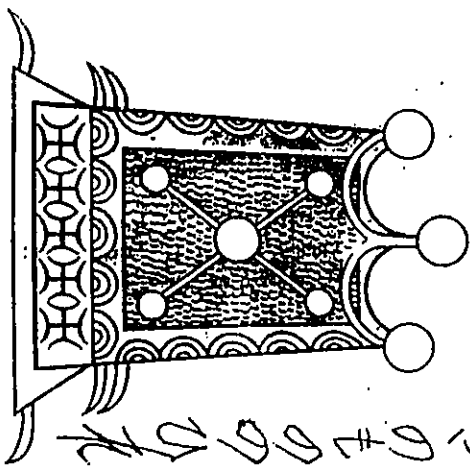
あかひのくさ



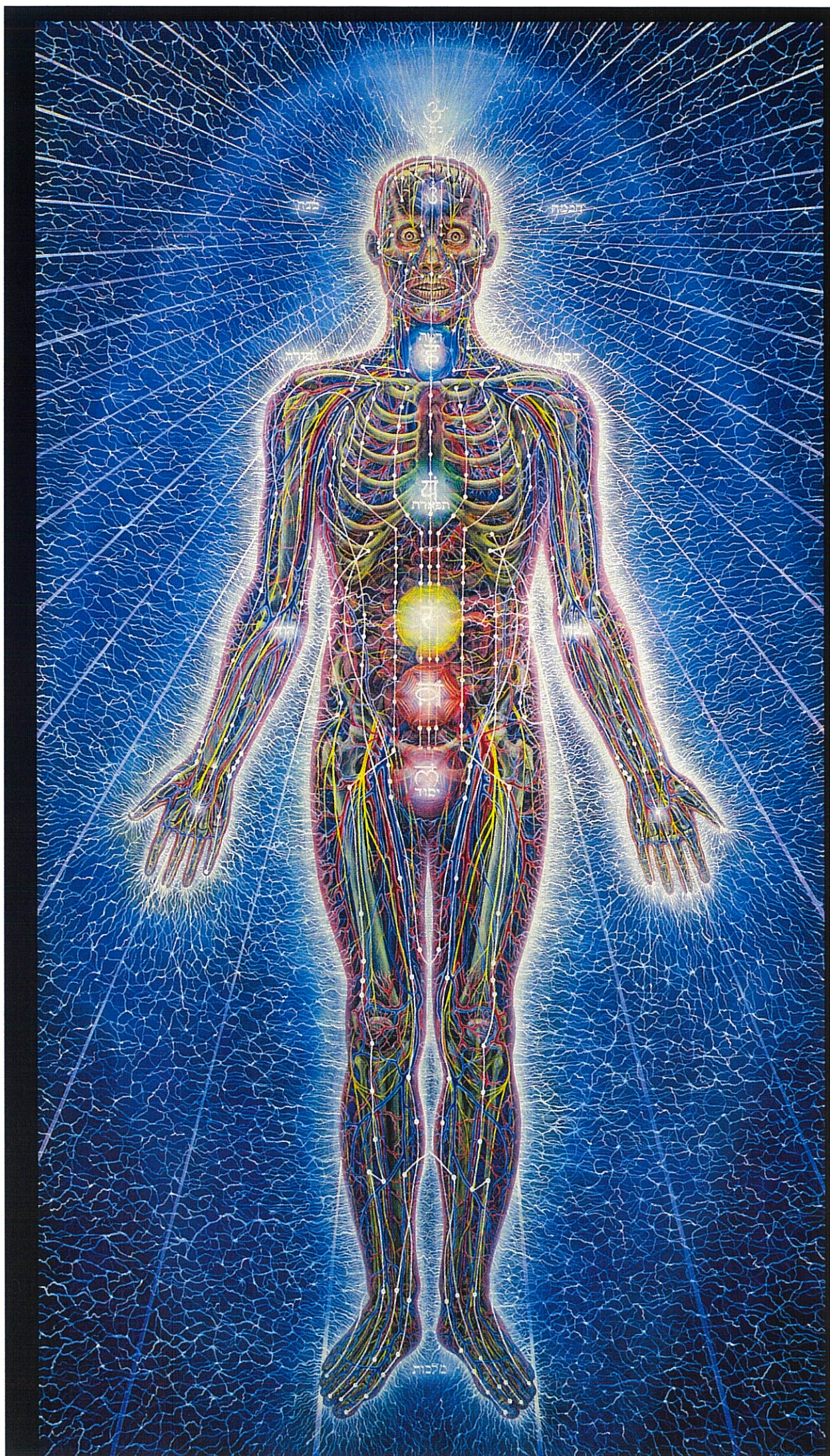
あかひのくさ

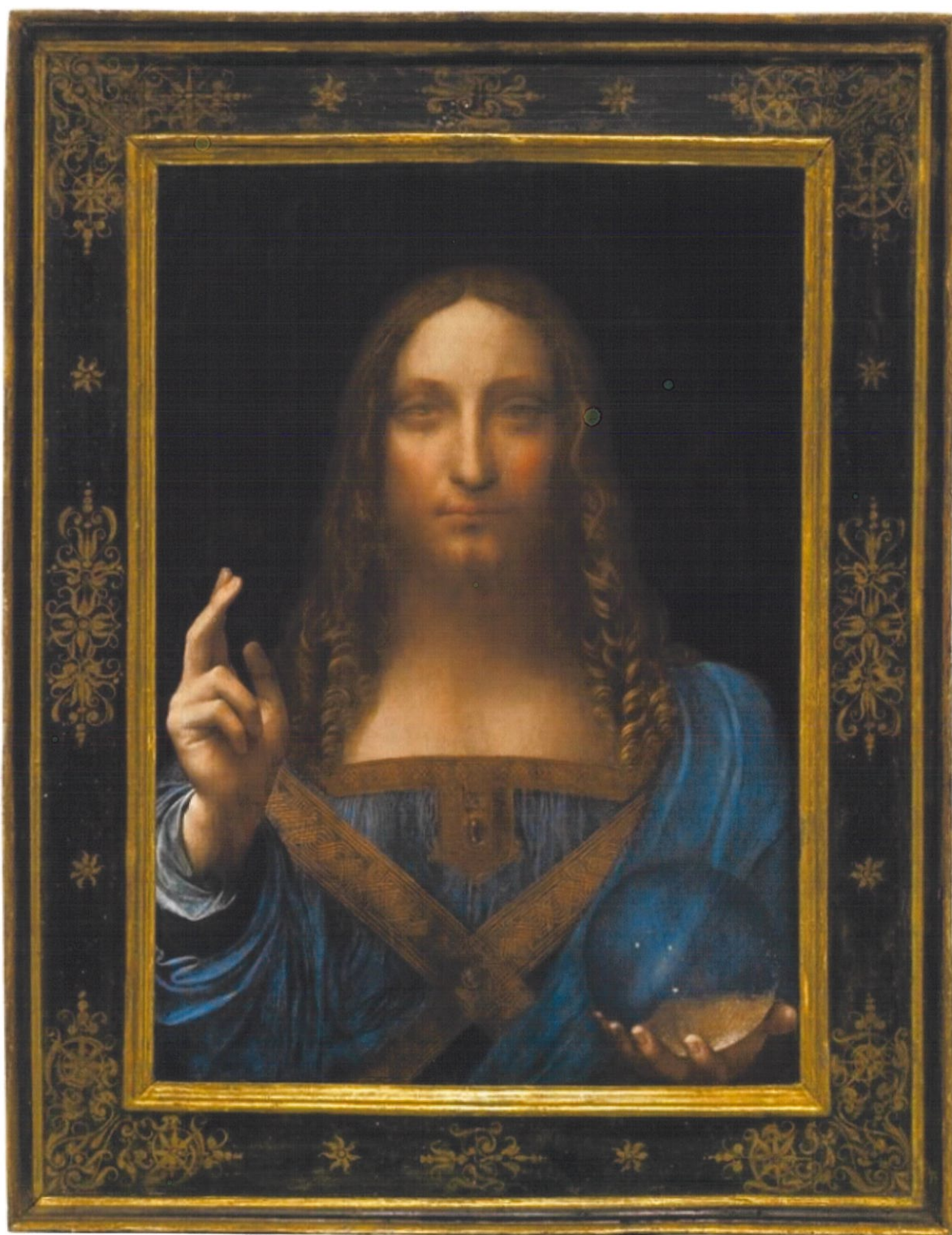


あかひのくさ



あかひのくさ





これは各人各自に、その位置を教えるものであります。

人それぞれに社会的地位や、財産や、才能の違いはあっても、神の子としての靈性は本来同じであるはずで

しかし、その人の生活態度・健康状態の差により根本魂である直日の力に強弱の違いが出て来ます。

直日とは、医学的に言えば自律神経であり、無意識的に我々の呼吸消化・吸収・体温調節・代謝・内分泌・排泄等の機能を調節している生命維持に欠くことの出来ないものであります。

この自律神経は、正しくは神律神経と言うべきで、天地の律動に合わせて生命の維持を司っている神の分霊でもありません。

みそぎでは、自律神経を天祖天護の天狹霧國禪日國狹霧尊として直日の働きを教えられています。

現代人の大半は、ストレスの為、この直日（自律神経）の力が衰弱して半病人の状態になっているように思われます。そこで、本来の健康を取り戻し、

靈性を再開発するために、その本来の位置を明らかにすることが必要となつて来るのであります。

位置を明らかにするとは、位置に対する作法を修めることであり、これが直ちに神の子としての自己に対する作

法となるのです。

先づ、正しく坐ることから實行します。坐法は端坐（正坐）・盤坐どちらでもかまいません。足は端坐の時は親指を重ね合せ、盤坐の時は片方の踵が会陰につくようにします。

要は、背骨が正しい位置に在ることです。枕骨と尾骨が垂直線上にあり、左右どちらへも傾かず、真直ぐに坐ることが大切であります。

これは、天御柱としての身を整え、心御柱である境を清めることになり、心之御柱と称える○神の御座が出来上り、ここに神界に入るの門が開くのであります。

○拍手・拜
みそぎでは、通常四拍手二拜を行ないます。その方法は、先づ両手を前方に乳の高さに上げて、肘を伸ばして手を合せます。次に右手を五分位手前に引き、両腕を真横に開いて拍ち、続いて肩巾に開いて二回拍ち、更に真横に開いて打ちます。次に両手の中指をつ

たた儘、親指を曲げ掌を内に向けて真横に開き、眼の下に持てきます。そして、両手をその儘で下腹の下部（脐の下）へ掌を上に向け小指側を當て、静かに一礼しながら掌を下腹へ伏せて押え神の声を聞きます。更に同様にして両手を眼の高さ（眼が隠れる位）に持って行き、続いて水月に當て一礼し乍ら心臓の音を聞くのであります。

「両掌を合するものは二の一なること

を知らしめたまひ 開きて復 合するものは一の二なることを教へられたるそのまゝを復習するの義なり。而して其の一とは五なることを五指にて教へ、更に一と一と合したる二の一、一の二なる十とは零にして満数なることを知らしめたるなり。二に於て五はものは二柱御祖神を拜みまつるの義なり。」と多田雄三翁が教えられている如く、この拍手の数・拜の数は数理に關しての神道の極秘に属し、また厳しき神律に在るものであります。

特に二拍手は、「妖魔の作法にして神を祭るべきものにあらず。これらは國家の敵儀を演ずるに似て言語道断なり。」と多田翁が説かれています。

ですから拍手は俗間で言われているような「かしはで」とか、「かしらで」とか、「てうち」とか言うものではなく、「かみしらすて」の義であります。

「かみしらすて」とは、手を拍つびき、その響きによつてこの身このまま神の身で、その場がそのまま一圓光明の神國樂園であることを知らしめるもので、振魂で、佛眼の秘事であると教えられています。

また拜も単なる叩頭ではありません。両手を相並べて神の光に向け、その光を受けて光と自己とが一體になるとの義で、並べた両手を八開手と言ひ、八種雷神の秘神事なのであります。

そして山上の円光と共に拍手もまた、その人の境涯を示すのであります。一

手、このような響きに達した時には山上の円光もまた赫灼として輝き、その人は神の國に実在するのであります。

丁卯

天照皇大御神

眞佐

大國

御名

事

生

見

武内

天御由主相

武内

時

天



多田流神道の「古事記」の解釈と「日本民族の信仰」について

一、数百年間、名古屋 大須観音 真福寺に所蔵されていた「古事記写本」が、「国宝」として指定され、国立博物館に保存されています

一、「古事記」は、西暦七二二年頃、朝廷語部 稗田阿礼が、言霊を口誦する「民族の伝承」を、太安萬侶が筆録した、と言われる「日本民族の信仰」の記録であります。

一、その解釈の一部は、岩波古典文学大系1「古事記 祝詞 倉田憲司及び武田祐吉 校注」として、岩波書店より刊行されています。

一、世界において、「神話」は、「民族の宇宙観や靈魂観」を、「物語」という形式でわかりやすい「寓話化」して表現された物語である、と云われています。

そして、その抽象化し、象徴化された「神話の宗教観」の中に、「神と人の関わり」が残っているともいわれています。

又、「神話」を正しく理解すれば、「神話」が語りかけてくる「時間・空間」を超越した「永遠の民族の真理」の「構造」が浮かび上がってくる、とも言われています。

一、世界的な神話学の権威ジョセフ・キャンベルや、歴史家アーノルド・トインビーは、過去を正しく理解できなければ、未来を正しく創造することができない、とも述べています。

一、神話学の分野では、神話とは、各民族が、その宇宙観や靈魂観を「物語」という形式で（解りやすい寓話として）表現したもの、もしくは「民族に潜在する意識の存在」を、「象徴」や「寓話」として表現したものである、と考えられています。

また、ユング流の心理学によれば、「民族の潜在的意識」というものは、千年や二千年で簡単に変わってしまふような存在ではなく、大仰に言えば、その中には、今もなお「民族の魂」が、その「当初の姿」のままだに保存されている、と定義されています。

だから、我々現代人にも、大昔の「神話」を「当初の姿」として正しく理解することさえできれば、遙かに時を越えて、「変わることのない民族の魂」へと辿り着き、「民族としての信仰の本来あるべき姿」をも、正しく理解することができるようになる、と思われるのです。

一、すなわち、現在に生きる我々は、「過去」からの「民族遺産」を正しく受け継ぐことによって、「未来」を創造してゆかなければなりません。

一、そして、多田雄三先師は、記紀三典を精読探考し、古典が云わんとする「教え」を再編成し、「信仰」の「礎」^{いしづえ}を築き上げたのであります。

一、何より注目すべきことは、過去、一千三百年間、「古事記 神代篇」巻頭、初文

「天地初めて発けし時、^{たかま}高天の原に成れる神の名は、^{あめのみなかぬしの}天之御中主神。^{（高の下の天を訓みてアマと云ふ。下は、此れにならへ。）}次に高御産巢日神。^{たかみむすひの}次に神産巢日神。^{かみむすひの}此の三柱の神は、並獨神と成り坐して、^{みなひとりかみ}身を隠したまひき。」と述べられています。

しかし、この神々が、どのような神々なのか、教義も説明も何も書かれないまま、古事記は、民族の意識が、様々な抽象的表現や多層的表現でなされ、重層的に構成されてしまい、何もわからないまま、単なる文章の説明話として、「獨神と成りまして、身を隠したまひき。」と、述べられてしまっているのです。

これでは、この千三百年前、我々の祖先が、この神々をどのように信仰していたのか、さっぱりわからないのであります。

そして、歴史上、本朝希代の大学者と言われる太安萬侶は、一体、何の目的で、このような「古事記」を編纂、そして、結局、なし崩し的に日本民族の「神話」を日本民族の「歴史」につなげてしまったのか、この千三百年間、だれにもわかりませんでした。

ある識者は、当時の不安定な政治状況から見て、国を統一するために、「宗教」と「神話」を、民族の「歴史としての事実」として結びつける必要があったのだ、とも述べています。

稗田阿礼の誦習した伝承を筆録したと言われる「日本神話」を宗教的に解説するには、その「神話」に象徴的に語られている「神界」や、「宇宙」や、「時間」や、「空間」の「構造」を、明確に把握しなければなりません。

この千三百年間、日本民族は、古事記に記述された「神話」と「歴史」を信仰し、その「信仰」と共に「歴史」が作られてきたものと信じていました。

しかし、その実体は、「信仰」の「象徴」である「神話による神々」が、誤字脱字や誤解の多い「古事記」に記載されている内容に基づいて漠然と信仰されてきたのであります。

そして、驚愕すべき事実として、太安萬侶の誤表現によって、民族の信仰が、すでに千三百年前に崩壊していたことを、明治の神道家多田雄三は、指摘したのであります。

一、六十年前、明治の神道家多田雄三は、「古事記神話の宗教観」を解義し、キリスト教における「聖書」のような「信仰への導き」とする「日本民族の神典」として、「古事記」に新たな生命を吹き込んだのであります。

一、明治の神道家多田雄三は、太安萬侶の編纂した「古事記 神代篇」を神学的に解剖し、日本人の正しい「宇宙観」と「靈魂観」を創出し、「日本民族の信仰」として再生に成功したのであります。

一、つまり、「古事記神話」の文学的に表現した意図をくみとり、文学的に象徴化された抽象概念を宗教的に理論化し、日本民族の「宗教観」として。その「宇宙観と靈魂観の本来の姿」を明らかにし、それに基づいて、「日本民族の信仰」を、「その本来あるべき形」として創成したのであります。

一、その基本的理念は、「日（ヒ）」の解義による「ひの音」による展開であり、「比」、「火」、「日」、「靈」、「魂」、と漢字表徴される日本人の「深層意識」へ働きかけ、その「深層意識」に眠る「民族の意識」を、「記紀三典の対読」を基として、「民族の靈魂観と宇宙観」として、創成したのであります。

そのを挙げれば、前記、古事記冒頭部に出現する「天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）」と、古神道に伝わる「天之御中主大御神（アマノミナカヌシノオホカミ）」とは、全く違う次元を異にする「造物主としての表象」であることを解明し、更に古事記において、稗田阿礼の誦習する「神話」を太安萬侶が筆録する際に、聞き間違えて筆録した、と思われる、「かみ」、「神」、「大神」、「大御神」の誤記を解明し、更に、「みこと」、「命」、「尊」の誤活用をも解明したのであります。

私たちは、過去千三百年間、「神話」や、「天皇」や、「国家」や、「宗教」や、「歴史」を巡って、様々な悲劇を繰り返してきました。

「日本民族の信仰」としての「日本神道」の「解釈」を巡って、様々な社会現象が発生し、それによって、

日本国民が犠牲になったことも歴史上、事実であります。

私達は、「過去の事実」を明瞭に把握して、「健全な未来」を創造してゆかなければなりません。

そのためには、「日本民族」の「神話」を明確に把握し、正しい「日本民族の信仰」を確立することこそが、明るく発展的な「未来」を創造することに、繋がっていくと信じるのであります。

一、千三百年間、誰一人解明できなかった日本人の深層意識による「言霊の幸による日本民族の信仰」の原点としての日本神話の神典の教義を理解して頂き、個人の魂に潜在する「日本人としての永遠の霊魂」を覚醒することが、現代に生きる我々の務めであり、又、その結果を後世の日本人に伝えてゆく使命があると信じる次第であります。

古事記上卷

并あはせて序

臣安萬侶言しんやすまろまをす。夫それ、混元一既に凝こりて、氣象未いまだ效あらはれず。名なも無く爲わざも無し。誰れか其の形を知らむ。然れども、乾坤けんこん初めて分れて、參神造化五の首はじめと作り、陰陽斯ここに開けて、二靈群品七の祖おやと爲なりき。所以このゆゑに、幽顯八に出入して、日月目九を洗ふに彰あらはれ、海水に浮沈して、神祇身を滌すすぐに呈あらはれき。故かれ、太素たいそは杳冥えうめいなれども、本教三に因よりて土くにを孕はらみ島を産みし時を識しり、元始一三は綿邈めんぼくなれども、先聖一四に頼よりて神二五を生み人を立てし世を察しりぬ。寔まことに知る、鏡二六を懸たげ珠たまを吐きて、百王二八相續三し、劍つるぎを喫くひ蛇へを切きりて、萬神蕃息ばんそくせしことを。安河やすのかはに議はかりて天下あめのしたを平ことむけ、

出入幽顯

夜寢床に這入つて將に眼に落ちんとする時の數秒間、朝醒めんとして將に意識が恢復せんとする間の數秒、此の間に天地の創めの消息があり、かくりよ幽界とあきつしま顯界の境界が體驗出來る。是は生死を超越し、自然と人生、差別と無差別の境目であり、絶對より相對に進發せんとする境目である。此の始源の境界を自在に出沒し得る様になつて、初めて惟神の道に就ての思索が可能である。故に太安萬呂も古事記序文に於て「幽顯に出入して」と斷はつてゐる。此の境地に於て古事記は述べられてゐるのである。

天武天皇は即位せらるゝや、其直後『四月十四日 皇女大来皇女ヲ天照大神宮ニ侍ラシメン為 泊瀬ノ齋宮ニ居ラシメ』

一年半余御潔斎の後、翌天武二年『十月九日大来宮皇女泊瀬齋宮ヨリ 伊勢神宮ニ向ハシメ』ている。

同年八月三日には『忍壁皇子ヲ石上神宮に遣ハレテ神宝ヲ整理セシム』更に、九年三月十七日『天皇大極殿ニ諸王臣ヲ召シテ帝紀及上古ノ事ヲ撰バシム』とあり、又

古事記序に『天皇詔したまはく 朕聞く諸家の賁^{もた}る所の、帝紀及び本辞 既に正実に違ひ、多く虚偽を加ふと。今の時に当りて、其失を改めずは、未だ幾^{いくばく}の年を経ずして、其の旨滅びむとす。斯^{これ}乃ち邦家の経緯、王家の鴻基^{こうき}なり。故^{かれこれ}惟帝紀を撰録し 旧辞を討^{うち}覈^{かく}して、偽を削り実を定め、後葉に流^{つた}へむとすとのたまふ』と安萬侶が記している。天武天皇は当時の国情に宸襟を悩まされ 積極的に 皇国肅正興隆のため 虚偽を改め、正実を伝えれと鋭意努力せられたのである。

和銅四年九月十八日、太安萬侶^{ふとのやすまろ}に元明帝より詔命あり、早くも翌和銅五年正月二十八日『古事記』を完成し之を奉献した。

古事記上卷 并せて序

臣安萬侶言す。夫れ、混元既に凝りて、氣象未だ效れず。名も無く爲も無し。誰れか其の形を知らむ。然れども、乾坤初めて分れて、參神造化の首と作り、陰陽斯に開けて、二靈群品の祖と爲りき。所以に、幽顯に出入して、日月星を洗ふに彰れ、海水に浮沈して、神祇身を滌ぐに呈れき。故、太素は杳冥なれども、本教に因りて土を孕み島を産みし時を識り、元始は綿邈なれども、先聖に頼りて神を生み人を立てし世を察りぬ。寔に知る、鏡を懸け珠を吐きて、百王相續し、劍を喫ひ蛇を切りて、萬神蕃息せしことを。安河に譲りて天下を平け、小瀆に論ひて國土を清めき。是を以ちて、番仁岐命、初めて高千嶺に降り、神倭天皇、秋津島に經歷したまひき。化熊川を出でて、天劍を高倉に獲、生尾徑を遮りて、大鳥吉野に導きき。儼を列ねて賊を攘ひ、歌を聞きて仇を伏はじめき。即ち、夢に覺りて神祇を敬ひたまひき。所以に賢后と稱す。烟を望みて黎元を撫でたまひき。今に聖帝と傳ふ。境を定め邦を開きて、近淡海に制め、姓を正し氏を撰びて、遠飛鳥に勸めたまひき。步驟各異に、文質同じか

大國隆正の思想(二)

多田山公

古事記は稗田阿禮が誦むところのものを太安萬侶の撰録し採庶したのだと云ふから、太安萬侶の伝へたのでも稗田阿禮の伝へたのでもない一種の伝と思はなければならぬ。唯、其の上表文は太安萬侶を任りのままに伝へて居るはずであるから、此れに依つて私共は一千二百年前の大学者が如何なる思想を懷いて居たかと云ふことを遺憾無く知ることが出来る。

此の上表文が世上流布の古事記に序文としてあるので本教の語も之れに依つて知られるが、この序文を読んで突然と出て来る「因本教」の語は誰でも一寸驚かされることと思ふ。全く突然なのである。

本教とは一体何なのか。前にも後にも右にも左にも上にも下にも何の連絡を持たぬ此の詞は何を意味して居るのか。本教と云ふから此の教との意

りたらしめようと思ふが其の類たるものが書いて無いのだから全く掴みやうが無い。

唯、其の結果だけを書いて「識孕土産嶋之時」と説明して居る。

そこで学者は之れを解釈しては神代からの伝説を指したので前に挙げた文章が此の教なのだと云ふ。

其の文章とは「乾坤初分。參神作造化之首。陰陽斯開。二靈爲群品之祖。所以出入幽顯。日月彰於洗目。浮沈海水。神祇呈於滌身。」と書いてある。

ゆくらゆくらときはうつりてときはきていまぞはなさくかみのことたま。

あちめ。

ああひがてんじんゆうあいこ

う。
あちめあちめあちめあちめあちめあちめあちめあちめ

ああひがてんじんゆうあいこ

う。
やしまじぬみ。

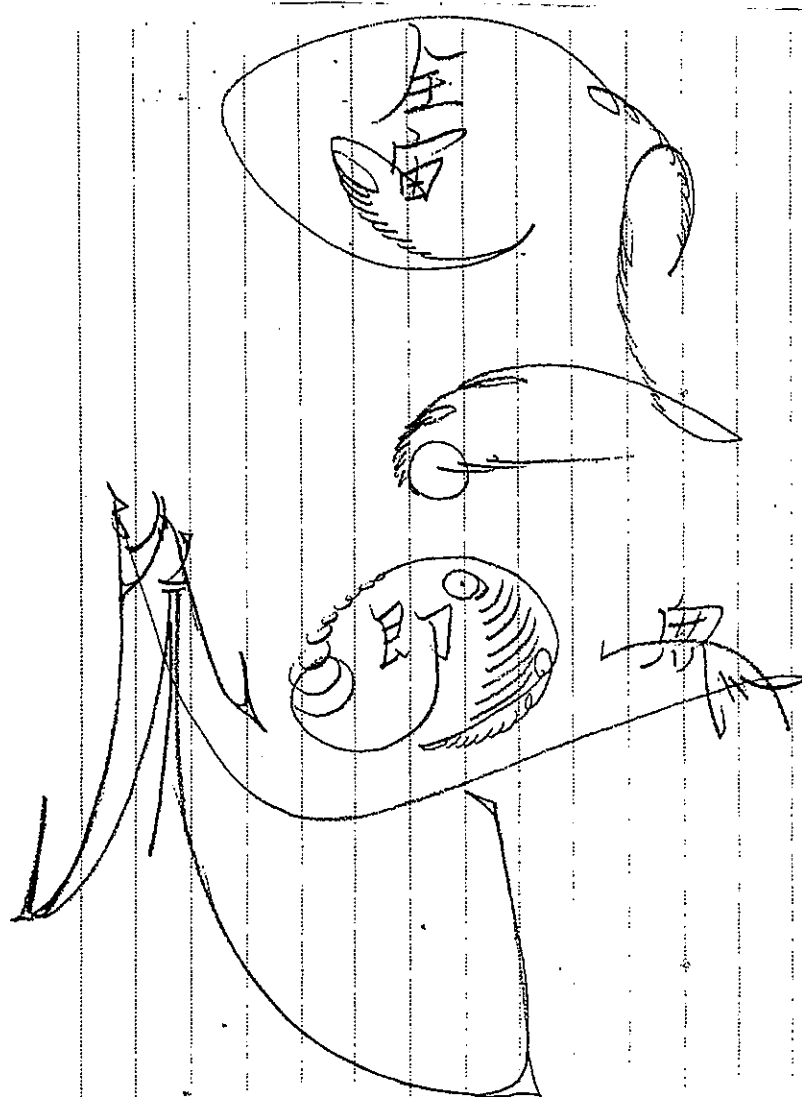
あちめ。

あうを。

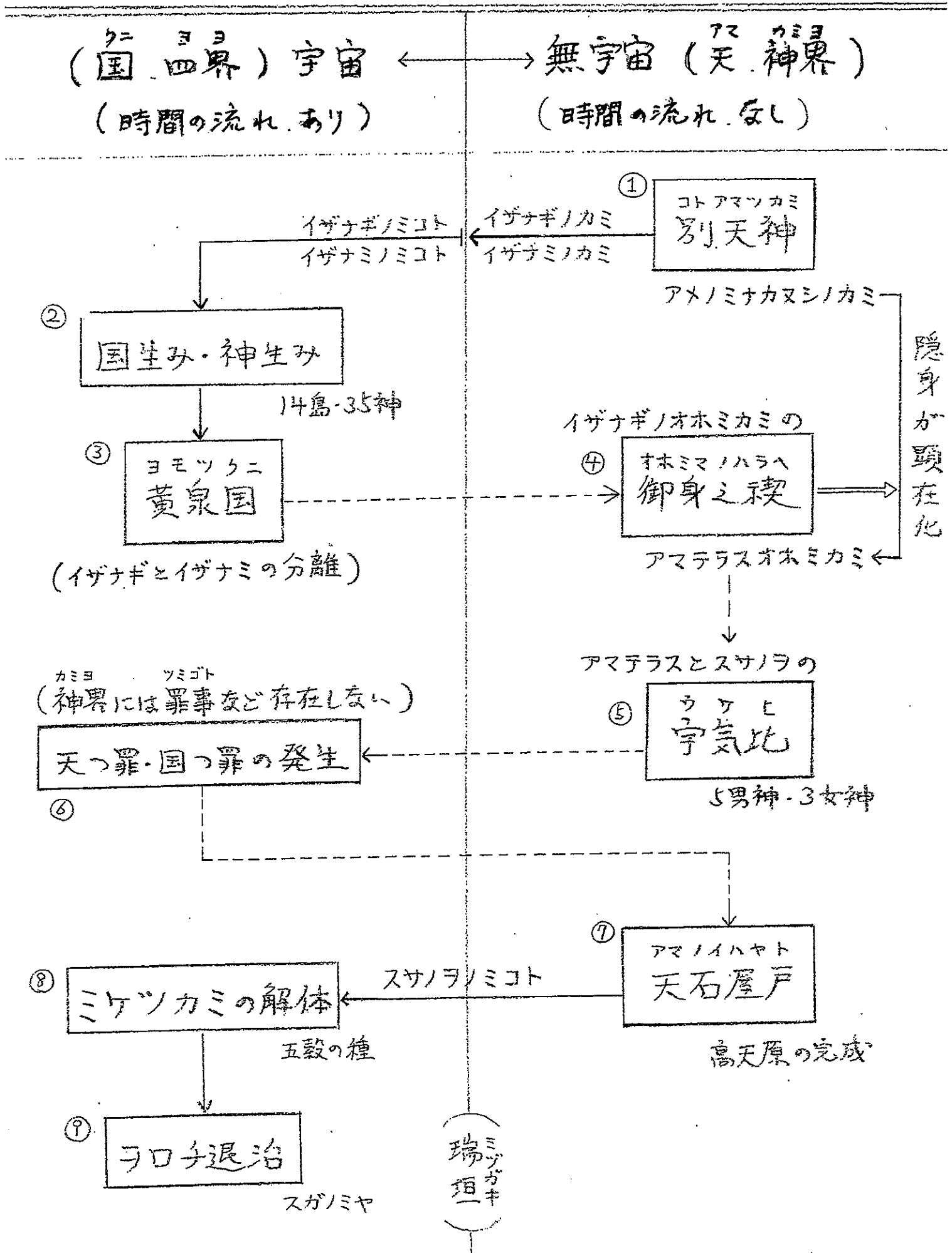
う。う。う。う。う。と。う

と。う。あう。

- 1、絶対唯一の時間
- 2、無限の時間
- 3、無限球体積の時間
- 4、動く時間
- 5、動かざる時間
- 6、時間ならざる時間



図表：古事記の神話の前半部の構成



二 水上に浮かんだ脂(動物の脂肪)、
二 海月(かき)のように漂っている時。

三 葦の芽のように芽を吹き出す。

三 書紀に「可美葦牙彦舅尊」とある。りっぱな葦の芽の男の神の意で、
国土の生長力の神格化。

四 高天の原に恒久にとどまっている神。

三 天つ神の中の特別な天つ神。

六 国土に恒久にとどまっている神。国土の根源神。

三 書紀には「豊斟淳尊」、「豊国主尊」、「豊組野尊」、「豊国野尊」その他種々の名が見える。

名義は未詳であるが、原野の神格化であろう。

六 小字の「上」は次の「去」と共にシナの四声の平上云入を借用して、「上」はその上の字の発音を上げるし、「去」は下げるしである。

去は一例のみ。

一 書紀に「泥土煮尊」とある。泥の神格化。

二 書紀に「沙土煮尊」とある。砂の神格化。

妹は対偶の女性神であることをあらわしている。

二 書紀に「角機尊、活機尊」とある。名義は未詳であるが、クイ

(杙・機・機)の神格化か。

三 書紀には「大戸摩彦尊、大戸摩姫尊」

之道尊、大古辺尊、大戸摩彦尊、大戸摩姫尊」

などであるが、多分居所の神格化であろう。

三 書紀に「面足尊」とある。顔かたちの完備したことの神格化。

三 書紀に「惶根尊」を始め種々の名が見える。人間の意識の発生を神格化したものであろう。

三 書紀に「伊弉諾尊、伊弉册尊」とある。互に誘(いざ)い合った男女の神の意であろう。岐は清音キの仮名。

別天神五柱

神世七代

天地初めて發けし時、高天の原に成れる神の名は、
天之御中主神。^一 天之御中主神。高の下天を訓みてアマと云ふ。
次に高御産巢日神。次に神産巢日神。此の三柱の神は、並獨神と成り坐して、身を隠したまひき。

次に國稚く浮きし脂の如くして、久羅下那州多陀用弊流時、
葦牙の如く萌え騰る物に因りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神。
次に天之常立神。常を訓みてトコと云ひ、此の二柱の神も亦、獨神と成り坐して、身を隠したまひき。

上の件の五柱の神は、別天神。

次に成れる神の名は、國之常立神。常立を訓むこと亦上の如くせよ。次に豐雲上野神。此の二柱の神も亦、獨神と成り坐して、身を隠したまひき。

次に成れる神の名は、宇比地邇上神、次に妹須比智邇去神。此の二神の名は音を以てよ。次に角杙神、次に妹活杙神。次に意富斗能地神、次に妹大斗乃辨神。此の二神の名も音を以てよ。

次に於母陀流神、次に妹阿夜上訶志古泥神。此の二神の名は音を以てよ。次に伊邪那岐神、次に妹伊邪那美神。此の二神の名も亦、音を以てよ。

「虹」と解したが、いずれにもわかに従いがたい。
二 画は攪の意で、かきまわされると。
三 海水。
三 今いうコロコロの擬声語。

三 攪き鳴らして。書紀には「画滄海而」とある。

三 自凝島でひとりにて凝って出来た島の意。この島の所在については諸説があつて明らかでない。

三 柱を見定めて立てる意。書紀に「化作八尋之殿、又化作天柱」とあるから、多分八尋殿とは別に屋外に立てられたものである。

三 大きな家屋。ここは新婚のための婚舎。

三 妻。

三 だんだん出来上つて行つて結局。

三 女陰。書紀に「雌元之処」、「陰元」とある。

三 男根。書紀に「雄元之処」、「陽元」とある。

三 さし入れふさいでの意。交接すること。

三 そうです、それがよいでしょう。

三 「しく」は過去の助動詞「き」の連体形「し」に副詞よりの「く」語尾を添えたもの。続紀宣命第十三詔に「朕に宣りたまひしく」と宣りたまひし大命を」とある。金光明最勝王經の古点参照。

三 婚姻の儀礼として柱を廻る習俗があつたかどうかは明らかでないが、何かの呪的宗教的儀礼として人々が柱を廻る習俗があつたのではあるまいか。

三 「みと」は御所で、ここでは婚姻の場所、「まぐはひ」は目合から転じた交接の意。

伊邪那岐命と伊邪那美命

1 国土の修理固成

2 二神の結婚

上の件の國之常立神以下、伊邪那美神以前を、并せて神世七代と稱ふ。上の二柱

の獨神は、各一代と云ふ。次に雙へる十神は、各二神を合せて一代と云ふ。

是に天つ神諸の命以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、「是の多

陀用弊流國を修め理り固め成せ。」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さし賜

ひき。故、二柱の神、天の浮橋に立たし立を訓みてタシと云ふ。て、其の沼矛を指し下ろして

畫きたまへば、鹽許々袁々呂々邇邇此の七字は畫き鳴し鳴を訓みてナシと云ふ。て引き上げたま

ふ時、其の矛の末より垂り落つる鹽、累なり積もりて島と成りき。是れ淤能碁

呂島なり。淤より以下の四字は音を以るよ。

其の島に天降り坐して、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき。是に其

の妹伊邪那美命に問曰ひたまはく、「汝が身は如何か成れる。」とひとたまへば、

「吾が身は、成り成りて成り合はざる處一處あり。」と答曰へたまひき。爾

に伊邪那岐命詔りたまはく、「我が身は、成り成りて成り餘れる處一處あり。

故、此の吾が身の成り餘れる處を以ちて、汝が身の成り合はざる處に刺し塞ぎ

て、國土を生み成さむと以爲ふ。生むこと奈何。」とのりたまへば、生を訓みてウムと云ふ。下は此

に伊邪那美命、「然善けむ。」と答曰へたまひき。爾に伊邪那岐命詔りたまひ

しく、「然らば吾と汝と是の天の御柱を行き廻り逢ひて、美斗能麻具波比此の七

字は音

「隠された^{ミヅガキ}瑞垣」の発見

古事記の冒頭では、まず五柱の神名を挙げた^あ後に、これを『^{こと あま かみ}別天つ神』と説明しており、続けて十二柱の神名を列挙してからこれを『^{あは かみよ ななよ い}并せて神世七代と称ふ』と説明している。

「別天つ神」という言葉の意味から考えて、その直後に名を挙げられている十二柱の神々はみな、当然に(普通の)「天つ神」である。『^{あは}并せて』と一括されている以上、順番としては末席となる『^{いざ なぎのかみ いざ なみのかみ}伊邪那岐神、伊邪那美神』も、もちろんその例外ではない。

ところが、次の文章では唐突に神名の語尾が変わり、『^{こと あま かみ おほせ も みこと みこと}是に天つ神の諸命以て、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に(中略)言依さし賜ひま』と書かれている。だが、よくよく考えると、『^{あま かみ おほせ も}天つ神の諸命以て』と言っている以上、この『^{みこと}伊邪那岐命、伊邪那美命』自身は当然に「天つ神」ではない。「^{こと}別天つ神」でもなく「天つ神」でもないのだから、この神名は当然に『「^{こと}国つ神」としての「イザナギ-イザナミ」』であると解釈すべきである。

／即ち、ここには「^{ミヅガキ}瑞垣」(無^(アメ)宇宙と宇^(ウニ)宙との境界)の存在が言外に暗示されているのである。

古事記の神話的表现について

神話は、言葉としては「日常の用語」で書かれているが、その意味するところは、決して文字どおりの「日常的な意味」ではない。

「時」というものも一定の時点を指して言っている訳ではなく、「次に」というのも時間の経過があつてことを意味している訳ではない。

「成れる」も、もちろん「その時点に到つて初めて成立した」という意味ではない。

「天地初めて発けし時」とは、神話表現上の決まり文句で、「一番最初の時」といった程度の意味、「次に国稚くくただよへる時」も同じ意味であつて、「天地初めて発けし時」から「時間の経過」があつた後の時点を指しているなどとは考えてはならない。

故に、「成れる」もまた「すでに成つていた」、もしくは「最初から存在していた」の意味に解釈すべきである。

「神世七代」も「そもそも時間が始まる前の状況」を指した用語である。（七の数理については幸76頁）

現代人は、「時」と聞くと、どうしても物理的客観的な時間ばかりをイメージしてしまうが、古代人は必ずしもそうではなかった。この「時」は、あえて現代風に訳すならば、「認識における状況」ぐらいの意味である。

つまり、客観的には、「今の時点」であっても、主観的には（認識における内面的な状況に於いては）全く同時に「天地初発之時」であることが、霊的には、可能である。

となれば、「次に」という用語も「時間の順序」ではなく、「認識の順番（ないしは序列）」指すものと言える。